

座席位置と被受容感・被拒絶感及び自我構造の関係

豊田弘司

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育心理学))

村田史恵

(奈良教育大学 学校教育教員養成課程心理学専修)

多根井重晴

(奥羽大学 薬学部)

Relationships among Seating Position, Sense-of-Acceptance and Rejection, and Structure of Ego

Hiroshi TOYOTA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Fumie MURATA

(Training Course of Psychology, Nara University of Education)

Shigeharu TANEI

(Department of Pharmacy, Ohu University)

要旨: 本研究の目的は、豊田・井上・多根井 (2017) と同じく、大学生を対象にして、仮想場面での座席位置と被受容感・被拒絶感及びエゴグラムとの関係を検討することであった。座席位置と被受容感・被拒絶感との関係では、仮想場面①座席 10 の選択者が座席 4 のそれよりも被受容感が高い傾向にあった。仮想場面③において座席 3 と 5 は、座席 1 よりも被受容感の低い傾向がうかがえた。また、エゴグラムとの関係では、仮想場面①における座席 9 を選択した者が座席 4 及び 6 を選択した者よりも FC 得点が高かった。さらに、仮想場面③における座席 3 の選択者は座席 4 の選択者よりも FC 得点が低い傾向があった。これらの結果は、個人の被受容感及びエゴグラムにおける FC 傾向の推定において、仮想場面を使用した座席選択が一部ではあるが、利用可能であることを示唆した。

キーワード: 座席位置 seating position
被受容感・被拒絶感 sense-of-acceptance and rejection
エゴグラム egogram

1. はじめに

学校教育において児童・生徒を取り巻く環境を整備することは重要である。環境を整備するためには、児童・生徒に影響する環境の規定因を明確にする必要があるが、古くから教室における環境と児童・生徒の心理的特性の関係が検討されてきた。集団の中で、自分が肯定的にみられていると感じる場合には、集団内の他のメンバーとの距離を近くする位置を選択するであろうし、反対に否定的にみられている場合には、集団の端に位置して他のメンバーとの距離をとるかもしれない。自己概念に関する研究 (Dykman & Reis, 1979; Frankel & Barrett, 1971; Stratton, Tekippe & Flick, 1973) によれば、座席位置は、個々の自己概念と関係のあることが示されている。自己概念が肯定的な者は、他者との距離が近くても全く不快を感じないし、むしろ他者との距離が近いことによって自尊感情が高まる可能性もある。他者との距離は、個人を包む空間としてのパーソナル・スペース (Personal Space; 以下 PS) によ

て規定される。本間 (2011) によれば、PS は、Sommer (1969) によって提唱され、いわば、もち運びのできるなわばり空間である。言い換えれば、他人の侵入を許さない個人を取り巻く見えない境界をもつ空間となる。渋谷 (1990) によれば、PS は前方に広く、両側方から後方にかけては密である玉子型をしている。青野 (1979) は、PS を反映する対人距離における性差を検討し、男性は女性よりも対人距離の大きいことを明らかにしている。また、年齢によって同性同士の距離は直線的に増大するが、異性同士の距離は思春期を頂点として、曲線的変化をたどることも明らかにされている。さらに、Leipold (1963) は、不安の高いほど PS が大きくなり、Duke & Nowicki, (1972) は、内的統制傾向によって PS の大きさが異なることを示している。

座席の選択に関して PS が反映されるが、Cook (1970) によれば、相手との親密性によって、視線と距離が異なり、それが座席選択に反映されると主張する。すなわち、嫌いな相手には距離を大きくとり、視線を避ける傾向があるが、親密な相手との距離は小さくなり、視線を避ける傾向は減

少する。また、小俣(1992)は、親しい相手と同席する際には横並びの席、親しくない相手の場合には離れた席が選択され、座席選択は相手との親密度に基づいて規定されることを示している。

座席選択と性格特性との関連に関しては、いくつかの研究がある。北川(1980)は、教室の前列や左右中央列に座る学生は YG 性格検査の安定積極型が多いことを明らかにしている。一方、渋谷(1986)によれば、YG 性格検査で不安定消極型(E型)の者は、大きな講義室では最初に座席を大きく移動し、後に特定の空間の座席に固執する。さらに、北川(2003)は、教室の左右のゾーンに着席する者は教員に対する心理的葛藤があること、教室の後方の座席に着席する者は授業に対する意欲が乏しいこと、前方の座席に着席する者は授業に対して真面目に取り組む者もしくは教員との親密度が高い者であることを指摘している。性格特性の中でもリーダーシップとの関連を検討した Hare & Bales(1963)は有名である。そこでは、長方形卓の短い辺と長い辺の中央の席を選択した者は討議の方向性を支配し、リーダーシップをとる傾向のあることが示されている。

このような性格特性と座席選択との関係を規定する要因としては、他者との関係において自己をどのようにとらえるかという視点である自己観が考えられる。豊田・井上・多根井(2017)及び多根井・豊田(2017)は、座席位置による相互独立的・協調的自己観(高田,2000,2011)の違いを明らかにしている。具体的には、本研究でも用いた仮想場面①において長方形卓の短辺に座る者は他の席に座る者よりも独断性が高いことが示されている。また、仮想場面③において3人席の右端の座席を選択する者は、独断性の低いことが示された。他にもいくつかの違いが示されているが、仮想場面による座席選択においてもこのような自己観による違いが見いだされたことは、仮想場面を用いるという方法が実際の座席選択と同じく、参加者の心理的特性を見いだすためのツールとして利用できる可能性を示唆している。本研究では、座席選択に反映されると考えられる心理的特性として、杉山(2002,2004)による被受容感(他者から受け入れられているという感覚)と被拒絶感(他者から拒否されているという感覚)を取り上げることにした。というのは、PSは相手から受容されていれば、小さくなる可能性があるし、拒絶されれば大きくなると予想できる。それ故、PSには相手からの受容と拒絶という感覚が反映される可能性が大きいと考えたのである。したがって、本研究における第1の目的は、豊田・井上・多根井(2017)が設定した仮想場面を用い、選択された座席位置と被受容・被拒絶感の関係を検討することである。なお、被受容感・被拒絶感の測定に関しては、杉山・坂本(2006)によって開発された被受容・被拒絶感尺度を用いる。

先に述べた豊田ら(2017)では、座席位置と自己観との関連を明らかにしたが、自己観と類似した概念として、自我構造がある。自我構造は、エゴグラム尺度で測定される

のが一般的であり、その構成は、以下に示す5つの自我状態に対応する尺度から構成される(豊田,2009)。

批判的な親(CP(critical parent))尺度 「厳しい父親」尺度とされ、この尺度得点が高い者は、他人に対して批判的であり、厳しいが、責任感も強いという特徴がある。

養育的な親(NP(nurturing parent))尺度 「やさしい母親」尺度といえる。この尺度得点が高い者は、共感性が高く、母親のように、他人を温かく受容し、世話好きな存在である。

大人の自我(A(adults))尺度 「大人としての成熟度」尺度といえる。この尺度得点が高い者は、理性的、合理的であり、現実的に対応できる人である。したがって、現実への適応という意味では重要である。

自由な子ども(FC(free child))尺度 「子どものような自由奔放さ」の尺度であり、得点の高い者は、子どものように明るく、自由奔放であり、感性や表現力が豊かであるが、感情的、衝動的という面もある。

順応した子ども(AC(adapted child))尺度 「いい子ちゃん」の尺度であり、得点の高い者は、素直であり、周囲との協調性も高い。周りの期待に応えようとする面が強い故に、自主性が乏しい面もある。

エゴグラムに反映される参加者の現在の自我構造は、座席位置の選択に反映される可能性がある。例えば、NPは、養育的自我を反映し、他者に対する関わり親密さを示す指標である。したがって、このNPが高い者は、他者との距離が近い位置を選択する可能性が高いと予想できる。また、FC尺度は、自分の意志に基づいて自由奔放に振る舞う傾向を反映している。したがって、FC傾向の高い者は、他者との距離を特に意識することなく、座席選択においても、特に特定の位置に対する執着はないと予想できる。反対に、AC尺度は、周りの期待に応えようとする自我状態である。したがって、AC傾向の高い者は、他者からの反感をかわない座席位置を選択すると予想できる。したがって、本研究における第2の目的は、上述したような予想を含めて、座席位置とエゴグラムの関係を検討することである。

2. 方法

2. 1. 調査対象

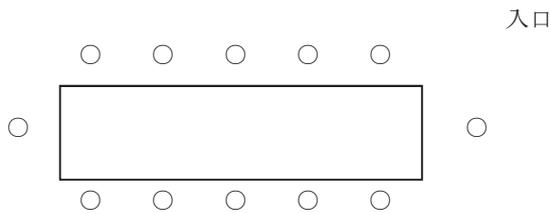
関西に位置する大学及び看護学校から学生合計 223 名(男性 69、女性 154)が調査に協力してくれた(平均年齢 19.26 歳)。ただし、本研究の第1の目的(被受容感・被拒絶感)に関する調査に協力してくれたのは、その内の 207 名(男性 64 名、女性 143 名)であった(平均年齢 19.14 歳)。これらの参加者は、第1著者の授業を受講した者であった。参加者には、調査用紙の提出は任意であり、成績とは関係ないこと、研究として結果を公表する可能性があるが、個人名は特定されないことが説明された。そして、調査終了後、研究に賛同できる場合にのみ提出を求めた。

2. 2. 調査内容

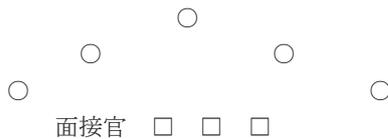
2. 2. 1. 仮想場面における座席の選択

豊田ら (2017) と同じ 3 つの仮想場面 (①同じ専修の 12 名の友人と夕食をとるとき、②採用試験で初対面の人と集団面接をするとき、③セミナーで初対面の人とグループ討論をするとき) を設定し、各場面で自分が座る位置を選択させた。以下に、実際に用いた調査内容を示している。

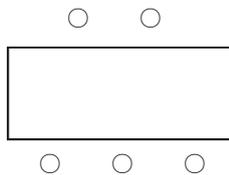
1) あなたは、同じ専修の友達 12 名で、夕食をするためにある店に来ました。座席は自由に選ぶことができます。さて、あなたは、どの席に座りますか？



2) あなたは、採用試験ではじめて会った人たち 4 名と集団で面接を受けることになりました。自由に座席を選ぶことができます。さて、あなたは、どの座席に座りますか？



3) あなたは、ある教職に関するセミナーに参加し、はじめて会った人たち 4 名と、話し合っ、一つの結論を出すように指示されました。さて、あなたは、どの座席に座りますか？



2. 2. 2. 被受容感・被拒絶感尺度

杉山・坂本 (2006) による尺度であり、「被受容感」(例: 私はたいてい受け入れられている。)及び「被拒絶感」(例: とかく無視されることが多い。)の 2 つの下位領域があり、それぞれ 8 項目ずつの計 16 項目で構成されている。回答は「全くあてはまらない (1)」から「よくあてはまる (5)」までの 5 件法である。

2. 2. 3. エゴグラムチェックリスト

杉田 (1990) から選択された項目からなる尺度を用いた。この尺度は、大学生が回答しにくい項目の表現を修正した簡易版である。上述した CP (項目例「後輩がミスをするとき、すぐにとがめますか。」、NP (「人から道を聞かれたとき、親切に教えてあげますか。」、A (「感情的というよりも、理性的なほうですか。」、FC (「うれしいときや悲しい

ときに、顔や動作にすぐ表しますか。)」及び AC (「あなたは遠慮がちで、消極的なほうですか。)」の各尺度に対応する項目が 10 項目ずつ、合計 50 項目から成っており、「はい」「いいえ」の 2 件法で回答するものであった。なお、原版では、「どちらでもない」という回答も含めた 3 件法であるが、本研究では豊田 (2009) と同じく、回答のしやすさとエゴグラムの特徴が見えやすいようにという配慮から 2 件法を採用した。それ故、採点は「はい」を 2 点、「いいえ」を 0 点としてカウントした。

2. 3. 調査手続き

第 1 著者の授業において、参加者の了承を得た上で上述した仮想場面における座席の選択、被受容・被拒絶感尺度及びエゴグラムチェックリストそれぞれを A4 用紙に印刷したものを配布し、集団で実施した。調査者 (第 1 著者) が教示を与え、各項目を読み上げて調査を行った。調査終了後、提出に賛同した参加者が調査用紙を提出した。

3. 結果と考察

3. 1. 仮想場面①における検討

Table 1 は、Fig. 1 に示した座席番号の選択者数及び各座席に対応する被受容・被拒絶感及びエゴグラムチェックリストの M (平均) と SD (標準偏差) が示されている。

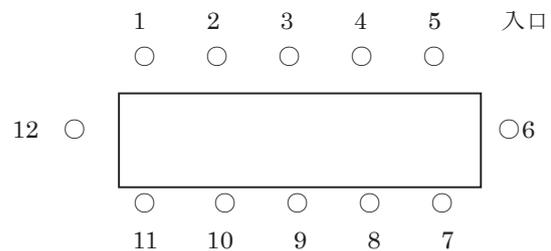


Fig. 1 データ整理のための座席番号 (仮想場面①)

3. 1. 1. 座席ごとの選択数

座席選択数に関しては、豊田ら (2017) と同じく、テーブルのセンターに位置する座席 (3、6、9、12) を選択する者が少ない。中心的座席に座ることは、集団の話題の中心になる可能性が高いため、それを避ける傾向があるといえよう。また、3 及び 9 の座席は左右から PS が侵害されることになるので避ける傾向が生じる可能性が高い。それに比べて、6 及び 12 の座席は両方に PS を確保できるが、Cook (1970) の指摘によると、周りの者との親密度にも依るが、全員からの視線が PS を侵害するという意識を生じさせるために敬遠される傾向があるであろう。

一方、選択数の多い座席は、座席 10 (全体の選択数の 16.43%)、座席 2 (同 14.01%) 及び座席 11 (同 13.53%) であった。座席 10 と 11 の選択数が多いことは豊田ら (2017) と一致している。これら 2 つの座席は、入口という PS を侵害される場所から遠く、周りからの注目も集めないという点で選択されたと考えられよう。豊田ら (2017)

における座席 2 の選択数も多かったが、座席 10 及び 11 のほぼ半数程度にとどまっていた。本研究と豊田ら (2017) を併せて考えると、入口から最も遠い席にあたる位置にある座席の選択数が多いということは、一貫した結果であるといえよう。

3. 1. 2. 座席と被受容感及び被拒絶感

被受容感及び被拒絶感における座席間の比較をするために、12 の座席位置を参加者間要因とする 1 要因の分散分析を下位尺度得点ごとに行った。豊田ら (2017) においても同様に性の要因を組み入れなかったが、それは、男女別にすると、選択数の少ない座席があることによる。

被受容感 被受容感得点に関する分散分析の結果、座席位置の主効果が有意傾向 ($F_{(11,195)}=1.80, p<.06$) であった。Tukey の HSD 法による多重比較を行った結果、座席 4 と座席 10 の間に有意傾向差 ($p<.08$) が認められ、座席 10 の選択者 ($M=30.74$) が座席 4 ($M=26.82$) のそれよりも被

受容感が高い傾向にあった。座席 10 の選択者は、PS を侵害されないという理由ではなく、周りから受容されているという感覚が、いわゆる入口近くの下座から入口から離れた上座の位置を選択させる可能性がうかがえる。また、座席 9 の選択者も被受容感が高かった ($M=31.30$)。この位置は机の長辺の中心であり、そこを選択することは、周りからの被受容感が高いと感じていることを反映しているといえよう。さらに、人数が少ないので分析の対象にはしなかったが、座席 6 の選択者 ($M=26.75$) も座席 4 の選択者より被受容感が低い。このことは、被受容感の低さがこの入口近くを選択する要因となっている可能性を示唆している。したがって、周りからの被受容感は、上座ー下座という次元での座席選択を規定する要因である可能性が考えられるのである。ただし、下座に位置する座席 5 については、会の幹事が通常着席する席であるので、その要因が加味され、多少被受容感は高くなっているのかもしれない ($M=29.10$)。

Table 1 選択座席ごとの被受容感・被拒絶感及びエゴグラムの各得点 (仮想場面①)

座席 番号	選択数		被受容感・被拒絶感		選択数		エゴグラム					
	男	女	被受容感	被拒絶感	男	女	CP	NP	A	FC	AC	
	64	143			69	154						
	計 207				計 223							
1	3	14	<i>M</i>	28.18	19.18	3	15	9.00	16.89	10.78	12.77	10.89
		17	<i>SD</i>	4.15	5.98		18	3.58	2.49	3.44	3.51	5.28
2	7	22	<i>M</i>	29.66	19.31	7	23	8.53	15.67	9.87	13.27	12.07
		29	<i>SD</i>	3.40	4.47		30	3.64	2.78	3.40	4.12	4.59
3	4	3	<i>M</i>	29.29	18.43	4	4	8.00	14.00	10.50	15.00	12.25
		7	<i>SD</i>	4.19	4.47		8	4.66	3.70	4.11	2.62	4.06
4	6	11	<i>M</i>	26.82	20.35	6	11	9.18	13.88	9.76	11.18	12.71
		17	<i>SD</i>	4.43	5.40		17	3.94	3.64	4.35	3.24	5.00
5	5	15	<i>M</i>	29.10	16.15	6	18	9.25	16.42	10.50	13.50	11.25
		20	<i>SD</i>	4.58	4.30		24	4.08	3.68	3.88	4.05	4.64
6	3	1	<i>M</i>	26.75	18.75	3	1	10.00	13.00	9.50	9.00	9.50
		4	<i>SD</i>	2.06	4.50		4	2.83	3.46	7.19	6.63	3.42
7	3	15	<i>M</i>	29.83	18.33	3	15	9.44	15.89	9.56	13.11	13.11
		18	<i>SD</i>	3.24	3.58		18	4.49	4.47	4.15	3.77	4.81
8	2	12	<i>M</i>	27.21	19.86	2	13	8.27	14.93	12.40	12.13	12.27
		14	<i>SD</i>	6.48	6.55		15	3.01	3.29	2.95	4.17	4.53
9	4	6	<i>M</i>	31.30	16.10	4	6	9.60	16.00	10.20	16.80	11.20
		10	<i>SD</i>	5.46	6.47		10	3.10	2.98	3.58	2.53	4.64
10	9	25	<i>M</i>	30.74	16.44	11	29	8.15	14.85	9.75	12.80	11.95
		34	<i>SD</i>	3.97	4.14		40	3.72	3.62	3.33	3.56	4.19
11	12	16	<i>M</i>	28.64	19.89	13	16	9.66	14.55	10.00	13.17	11.10
		28	<i>SD</i>	3.92	5.98		29	3.86	3.85	3.96	4.52	5.20
12	6	3	<i>M</i>	30.33	18.78	7	3	9.00	16.20	11.40	13.60	9.80
		9	<i>SD</i>	3.50	6.10		10	3.30	4.05	3.27	3.86	6.49

被拒絶感 被拒絶感得点に関する分散分析の結果、座席位置の主効果が有意傾向 ($F_{(11,195)}=1.66, p<.09$) であった。有意傾向であったので、Tukey の HSD 法による多重比較を行ったが、どの座席間にも被拒絶感得点の有意差は認められなかった。したがって、選択した座席による被拒絶感の差はないことが明らかになったのである。仮想場面①が、同じ専修の友達と夕食をするためという設定であるので、拒絶されているという感覚が反映されにくい場面であったのかもしれない。

3. 1. 3. 座席とエゴグラムの関係

CP CP 得点について分散分析を行った結果、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(11,211)}=.48$)。したがって、座席位置による CP 得点の差はないことが示された。

NP NP 得点に関する分散分析の結果、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(11,211)}=1.41$)。したがって、座席位置による NP 得点の違いはないことが明らかになった。

A A 得点に関する分散分析も、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(11,211)}=.48$)。したがって、座席位置による A 得点の違いもないことが示された。

FC FC 得点に関する分散分析を行ったところ、座席位置の主効果が有意であった ($F_{(11,211)}=1.95, p<.05$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行った結果、座席 9 を選択した者が座席 4 及び 6 を選択した者よりも FC 得点が高かった (ともに、 $p<.05$)。座席⑨は、長辺のセンターに位置するので、周りの者を盛り上げてはしゃぐという自由奔放が必要であるが、そのような自我状態が優勢な者がこの席を選択しやすい可能性がうかがえる。それに対して、座席④及び⑥は、下座に位置して控えめな者が選択する可能性が高いのであろう。Hare & Bales (1963)は、長方形卓の短辺と長辺のセンターに位置する席は討議の方向性を支配し、リーダーシップがとりやすい座席であると指摘している。FC の自我状態は、自分がイニシアティブをとって会話を進行するという意味ではリーダーシップとの共通性が高く、座席⑨の選択者の特徴が反映しているといえよう。

AC AC 得点に関する分散分析を行ったが、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(11,211)}=.60$)。したがって、座席位置による AC 得点の違いもないことが示された。

このように、FC 以外の NP や AC に関しては、予想と一致する結果は得られなかった。

3. 2. 仮想場面②における検討

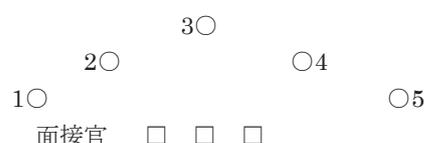


Fig.2 データ整理のための座席番号 (仮想場面②)

Fig.2 に示した座席番号の選択数及びその座席に対応する被受容感・被拒絶感尺度及びエゴグラムチェックリストの各得点の M と SD が、Table 2 に示されている。

3. 2. 1. 座席ごとの選択数

豊田ら (2017) と同じく、選択数は、両端の座席選択が他の座席選択よりも少なかった。両端に関しては、面接官との距離があるので、自分をアピールしにくい座席であるという理由によって選択が抑制された可能性が追証された。一方、センターの座席③に関しては、座席②及び④よりも選択数が少ないことも豊田ら (2017) と一致した。センターの座席を選択して、自分に注目が集まりすぎる懸念が抑制的に機能しているのであろう。

3. 2. 2. 座席と被受容感及び被拒絶感の関係

被受容感 男女ともに各座席選択数が 5 以下の座席であったので、仮想場面②に関しても、座席位置の参加者間要因とする 1 要因分散分析を行った。被受容感得点に関する分散分析の結果、座席配置の主効果 ($F_{(4, 202)} = .27$) は有意でなかった。したがって、仮想場面②による座席位置の違いによって被受容感の差はないことが明らかになった。

被拒絶感 被拒絶感得点に関する分散分析を行ったところ、座席配置の主効果 ($F_{(4, 202)} = .35$) は有意ではなかった。したがって、仮想場面②による座席位置の違いによって被拒絶感の差はないことが示された。

3. 2. 3. 座席とエゴグラムの関係

CP CP 得点について分散分析を行った結果、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(4,218)}=.07$)。したがって、座席位置による CP 得点の差はないことが示された。

NP NP 得点に関する分散分析の結果、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(4,218)}=1.64$)。したがって、座席位置による NP 得点の違いはないことが明らかになった。

A A 得点に関する分散分析も、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(4,218)}=.74$)。したがって、座席位置による A 得点の違いもないことが示された。

FC FC 得点に関する分散分析も、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(11,211)}=1.24$)。したがって、座席位置による FC 得点の違いもないことが示された。

AC AC 得点に関する分散分析を行ったが、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(4,218)}=1.49$)。

したがって、座席位置による AC 得点の違いもないことが示されたのである。仮想場面②においては、座席位置による自我構造の違いは全く見いだせなかったのである。面接場面では、採用にとって有利か否かという視点での座席選択があるので、自分の好みという視点での選択が抑制される可能性があり、それが結果に反映されているのであろう。

Table 2 選択座席ごとの被受容感・被拒絶感及びエゴグラムの各得点（仮想場面②）

座席 番号	選択数		被受容感・被拒絶感		選択数		エゴグラム					
	男	女	被受容感	被拒絶感	男	女	CP	NP	A	FC	AC	
	64	143			69	154						
	計	207			計	223						
1	2	10	<i>M</i>	28.92	17.42	2	11	8.77	16.31	9.69	13.54	12.00
	12		<i>SD</i>	5.07	6.33	13		4.04	3.73	4.31	3.38	6.43
2	20	49	<i>M</i>	29.57	18.25	20	53	8.79	15.62	9.78	13.51	12.33
	69		<i>SD</i>	4.30	5.57	73		3.91	3.63	3.58	3.51	4.57
3	19	28	<i>M</i>	28.94	19.11	24	29	9.06	15.70	10.68	13.55	10.72
	47		<i>SD</i>	4.36	4.98	53		3.43	3.31	4.04	4.20	4.59
4	21	51	<i>M</i>	29.09	18.28	21	56	8.88	14.52	10.54	12.31	11.97
	72		<i>SD</i>	4.21	4.89	77		3.86	3.68	3.46	4.27	4.52
5	2	5	<i>M</i>	28.29	18.71	2	5	9.43	16.29	9.43	12.29	9.14
	7		<i>SD</i>	4.39	5.22	7		2.76	2.14	4.72	3.90	5.64

3. 3. 仮想場面③における検討

Fig.3 に示した座席番号の選択数及びその座席に対応する被受容感・被拒絶感及びエゴグラムチェックリストの各得点の M と SD が、Table 3 に示されている。

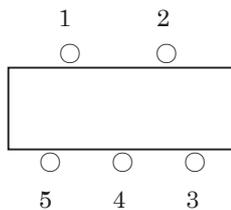


Fig.3 データ整理のための座席番号（仮想場面③）

3. 3. 1. 座席ごとの選択数

豊田ら（2017）と同じく、3席の列の中心の座席（座席4）の選択数が少ない。両端を囲まれるという位置は PS を侵害されるために、敬遠される傾向があることが追認されたのである。

3. 3. 2. 座席と被受容感及び被拒絶感の関係

被受容感 仮想場面③に関しても、他の仮想場面と同じく、座席位置の参加者間要因とする 1 要因分散分析を行った。被受容感得点に関する分散分析の結果、座席配置の主効果が有意傾向であった ($F_{(4,202)}=2.27, p<.07$)。この主効果について Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、座席間の差は有意には至らなかった（座席 1 と 3 の間は $p<.18$ 、座席 1 と 5 の間は $p<.15$ ）。しかし、通常分散分析による F 値が有意でない場合には適用しないが、座席間の違いを探索的に検討するために Fisher の LSD 法によって座席間の比較を行った。その結果、座席 1 と 3 の間は $p<.029$ 、座席 1 と 5 の間は $p<.022$ でそれぞれ有意差が検出された。したがって、座席 3 と 5 は、座席 1 よりも被受容感の低い傾向がうかがえる。豊田ら（2017）にお

いても、座席 3 は、座席 1 及び 4 よりも相互独立—協調的自己観尺度の下位尺度である個の認識・主張及び独断性得点の低いことが明らかにされている。座席 3 は 3 つの座席の内の末席にあたるので、この位置を選択する者は、他の座席選択者と比べて被受容感の低い可能性が示唆された。したがって、座席 3 の選択者は、他の座席選択者と比べて独自性が高い可能性がうかがえる。

被拒絶感 被拒絶感得点に関する分散分析の結果、座席配置の主効果 ($F_{(4,202)}=.79$)は有意でなく、仮想場面③による座席位置の違いによって被拒絶感の差はないことが明らかにされた。したがって、本研究で取り上げた座席位置によっては、被拒絶感の違いは全く見いだされなかった。被拒絶感の違いは、座席位置に反映されにくいと考えることもできるが、被拒絶感の違いが反映されやすい座席選択の仮想場面を設定することも考慮する必要がある。

3. 3. 3. 座席とエゴグラムの関係

CP CP 得点について分散分析を行った結果、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(4,218)}=1.85$)。したがって、座席位置による CP 得点の差はないことが示された。

NP NP 得点に関する分散分析の結果、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(4,218)}=.31$)。したがって、座席位置による NP 得点の違いはないことが明らかになった。

A A 得点に関する分散分析も、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(4,218)}=.71$)。したがって、座席位置による A 得点の違いもないことが示された。

FC FC 得点に関する分散分析も、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(4,218)}=1.14$)。したがって、座席位置による FC 得点の違いもないことが示された。ただし、座席間の違いを探索的に検討するために、Fisher の LSD 法によって座席間の比較を行った結果、座席 3 と 4 の間は、 $p<.045$ で有意差が検出された。したがって座席 3 の選択者は座席 4 の選択者より FC 得点が低い傾向がある。

Table 3 選択座席ごとの被受容感・被拒絶感及びエゴグラムの各得点（仮想場面③）

座席 番号	選択数		被受容感・被拒絶感		選択数		エゴグラム					
	男	女	被受容感	被拒絶感	男	女	CP	NP	A	FC	AC	
	64	143			69	154						
	計	207			計	223						
1	14	65	<i>M</i>	29.85	17.73	16	68	9.14	15.21	9.98	13.07	11.50
		79	<i>SD</i>	3.37	4.69		84	3.69	3.94	3.60	3.85	4.69
2	21	35	<i>M</i>	29.46	18.79	22	39	9.41	15.44	10.66	13.21	11.21
		56	<i>SD</i>	3.99	4.98		61	3.58	3.41	3.81	4.46	4.82
3	6	16	<i>M</i>	27.59	18.09	6	18	7.08	15.33	10.08	12.08	13.08
		22	<i>SD</i>	4.26	5.14		24	3.68	3.42	3.56	3.80	4.25
4	10	7	<i>M</i>	29.82	18.76	12	8	8.90	16.00	11.10	14.50	12.30
		17	<i>SD</i>	5.02	4.96		20	3.40	3.37	4.47	3.94	4.95
5	13	20	<i>M</i>	27.82	19.48	13	21	8.71	14.94	9.76	12.65	11.76
		33	<i>SD</i>	5.89	6.80		34	4.12	3.20	3.58	3.37	4.94

座席 4 は長辺のセンターに位置するので、自由奔放に振る舞うという自我状態が好む位置である。一方、座席 3 は末席であり、そのような自由奔放さを発揮することを好まない者が選択する可能性がうかがえる。

AC AC 得点に関する分散分析を行ったが、座席位置の主効果は有意でなかった ($F_{(4,218)}=.79$)。Table 3 の平均値をみると、座席 3 の選択者が他の座席選択者よりも AC 得点が高いので、Fisher の LSD 法によって座席間の比較を試みたが、有意差は検出されなかった。したがって、AC においても座席間の違いは見いだされなかったのである。

4. 結論と今後の課題

本研究は、豊田ら (2017) と同じように、長方形卓を使用した際の仮想場面における座席選択によって被受容感・被拒絶感及びエゴグラムによって測定される自我状態に違いが生じるか否かを検討した。その結果、「同じ専修の友人と夕食をとる」仮想場面①では、上座に位置する座席 10 の選択者が下座に位置する座席 4 の選択者よりも被受容感が高い傾向にあった。また、「初対面の人（自分を含めて 5 人）と討論をする」仮想場面③において 3 人席の両端に位置する座席 3 と 5 は、2 人席に位置する座席 1 よりも被受容感の低い傾向がうかがえた。しかし、被拒絶感に関しては、座席位置による違いは見いだせなかった。また、エゴグラムとの関係では、仮想場面①における長辺のセンターに位置する座席 9 を選択した者が下座に位置する座席 4 及び 6 を選択した者よりも自由奔放な自我状態を反映する FC 得点が高かった。さらに、仮想場面③における 3 人席の端に位置する座席 3 の選択者はセンターに位置する座席 4 の選択者よりも FC 得点が低い傾向があった。これらの結果は、被受容感及びエゴグラムにおける FC 傾向の推定においては、仮想場面①及び③を使用した座席選択が利用可能であることを示唆している。豊田ら (2017)

が相互独立一協調的自己観と座席位置との関係を明らかにしたのに続き、本研究も同じ仮想場面を用いて、被受容感と FC 傾向との関係を明らかにできたのである。確かに仮想場面の設定による個人差のアセスメントの可能性が示唆されたが、本研究の教育的意義はそれだけではない。

学校教育において近年注目されているのが、社会性と情動の学習 (SEL ; Social and Emotional Learning) である (小泉, 2011 ; 小泉・山田, 2011a, b)。これは、児童・生徒の対人関係能力の育成を目指し、特に感情をコントロールするスキルを習得させる教育活動を意味している。感情をコントロールする上で特に怒りや不安等のネガティブな感情を抑制することは重要な課題である。児童・生徒に限らず、大人においても、怒り感情のコントロールに注目した言葉として、アンガーマネジメントが知られている (安藤, 2008, 2016)。このように、対人関係能力に関わる特性を促すための教育方法の開発が求められているのである。

本研究は、選択された座席位置が被受容感の程度及び自我構造の特徴が反映されることをうかがわせた。見方を換えれば、その座席に座らせることによって、その座席に対応する特性が発揮されやすくなるという可能性がある。具体的には、上座の座席に座らせることによって周りから受容されているという感覚を持たせることが期待できる。また、その座席に座って周りからの受容的な対応を受ければ、それによって被受容感が増していく可能性が高い。

Howells & Becker(1962)は、2 人席の片方に座った者が、3 人席のいずれかに座った者よりも、その場の議論のイニシアティブをとる確率の高いことを示している。また、先に紹介した Hare & Bales (1963)では、長方形卓の短辺と長辺の中央の席を選択した者は討議の方向性を支配し、リーダーシップをとる傾向のあることが示されている。ただし、本研究では仮想場面①における座席 6 を選択した者は人数 (n=4) が少ないこともあって被受容感及び FC 得

点ともに低くなっている。研究による違いは見られるが、これらの研究は、座席位置によって集団での役割（リーダーシップ）が決まる可能性を示唆している。したがって、本研究は、ある特性が発揮されやすい座席位置を特定するための探索的研究という位置づけが可能になる。その探索的研究で得られたデータを参考にして座席位置を設定し、児童・生徒の習得すべき特性（例えば、リーダーシップ）を上述したような SEL による指導を通して育成していくことが重要であろう。

最後に、本研究及び豊田ら（2017）では、仮想場面を用いた検討を行い、座席位置による相互独立的・相互協調的自己観、被受容感及び自由奔放な自我状態の違いを見いだした。今後も、これらの特性以外の個人差特徴と座席位置との関係を検討していく必要がある。

引用文献

- 安藤俊介 (2008), アンガー・マネジメント 大和出版
 安藤俊介 (2016), アンガーマネジメント入門 朝日新聞出版
 青野篤子 (1979), 対人距離に関する発達の研究 実験社会心理学研究, 19, 97-105.
 Cook, M. (1970), Experiments on orientation and proxemics. *Human Relations*, 23, 61-76.
 Duke, M. P., & Nowicki, S., Jr. (1972), A new measure and social-learning model for interpersonal distance. *Journal of Experimental Research in Personality*, 6, 119-132.
 Dykman, B. M. & Reis, H. T. (1979), Personality correlates of classroom seating position. *Journal of Educational Psychology*, 71, 346-354.
 Frankel, A. S., & Barrett, J. (1971), Variations in personal space as a function of authoritarianism, self-esteem, and racial characteristics of a stimulus situation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 37, 95-98.
 Hare, A. P. & Bales, R. F. (1963), Seating position and small group interaction. *Sociometry*, 480-486.
 Howells, L. & Becker, S. (1962), Seating arrangement and leadership emergence. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, 148-150.
 本間道子 (2011), パーソナルスペース 「キーワードコレクション 社会心理学」二宮克美・子安増生(編)新曜社 176-179.
 北川歳昭 (1980), 座席行動の研究 (II): 教室内の座席行動と性格特性 中国短期大学紀要, 11, 32-45.
 北川歳昭 (2003), 教室空間における着席位置の意味 風間書房
 小泉令三 (2011), 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践 ミネルヴァ書房
 小泉令三・山田洋平 (2011a), 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方 小学校編 ミネルヴァ書房
 小泉令三・山田洋平 (2011b), 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方 中学校編 ミネルヴァ書房
 Leipold, W. E. (1963), Psychological distance in a dyadic interview as a function of introversion-extroversion, anxiety, social desirability, and stress. Unpublished doctoral dissertation. University of North Dakota. (Dykman & Reis, 1979 による).
 小俣謙二 (1992), 日本人学生の座席選択にみられる特徴 名古屋文理短期大学紀要, 17, 9-16.
 Stratton, L. O., Tekippe, D. J., & Flick, G. L. (1973), Personal space and self-concept. *Sociometry*, 36, 424-429.
 高田利武 (2000), 相互独立的 - 相互協調的自己観尺度について 奈良大学総合研究所所報, 8, 145-163.
 高田利武 (2011), 相互独立性・相互協調性の発達の变化: 青年期を中心とした縦断的検討 発達心理学研究, 22, 149-156.
 渋谷昌三 (1986), 教室のプロセミックス - 座席位置の分析 - 山梨医大紀要, 3, 40-49.
 渋谷昌三 (1990), NHK ブックス『人と人との快適距離 パーソナル・スペースとは何か』日本放送出版協会
 Sommer, R. (1967), Small group ecology. *Psychological Bulletin*, 67, 145-152.
 杉田峰康 (1990), 医師・ナースのための臨床交流分析入門 医歯薬出版
 杉山崇 (2002), 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究 心理臨床学研究, 19, 589-597.
 杉山崇 (2004), 他者注目と気分における被受容感・被拒絶感 日本認知心理学会第2回大会, 2-14.
 杉山崇・坂本真士 (2006), 抑うつと対人関係要因の研究—被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつの自己認知過程の検討— 健康心理学研究, 19, 1-10.
 多根井重晴・豊田弘司 (2017), 座席選択による相互独立的—相互協調的自己観の違い 日本教育心理学会第59回総会発表論文集 720.
 豊田弘司 (2009), 大学生における自我構造、自尊感情及び随伴経験の関係 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 19, 1-5.
 豊田弘司・井上紗智・多根井重晴 (2017), 座席位置と相互協調的—相互協調的自己観の関係 奈良教育大学紀要 66, 23-30.